パンデミックとマイホーム

白井　宏昌
環境建築デザイン学科

「ステイホーム」

新型コロナウイルス感染拡大により、私たちの生活行動は大きく変わった。外出する際には常にマスクをすることが求められ、他人とはおおよそ2メートルという物理的な距離を取ることが推奨される。そもそも外出すること自体が自粛されるよう要請されることもしばしばで、東京都の小池百合子都知事は「いのちを守るSTAY HOME週間」を掲げ、おうちにいましょうと呼びかけ[1]、イギリスのボリス・ジョンソンも「多くの命を守るため、この感染拡大を抑えなければならない。そのために私たちはひとつのシンプルな指針を出します。You must stay at home[2]. 」と訴えた。コロナ禍において、「ステイホーム」という言葉は、日本のみではなく、世界中で語れる標語となった。

そこで「ホーム」である。2020年初頭から始まったパンデミックは、人々に家に籠ることを強いたが、それは多くの人々にとって、これまでになく自らの「ホーム」と向き合うきっかけとなったのではないだろうか。都市部で毎日、満員電車に乗って会社に通勤していた人々は、家で働くよう要請された。そこで多くの人が気づいたのが、私たちの家の「つくり」である。

「ホーム」：機能の問題

「ステイホーム」の間に多くの声があがったのが、「家で働く場所がない」というものだった。なぜだろうか？現代の日本の「すまい＝ホーム」の多くは、nLDKという言葉に代表されるように、ある決まった機能配置に基づいている。寝室（個室）の数を示すn、そして家族の団欒を想起させるリビング・ダイニング・キッチンの３つの空間、これらに風呂・洗面・トイレの水場を足して、廊下でつなげば住まいは完成する。nLDKという住まいのタイプは第二次世界大戦後、壊滅的となった日本の住まいを、来るべき成長期に向けて、いかに効率的に供給するかを前提に確立された「すまい」の「かた」である。そしてこのnLDKという「かた」はその後、圧倒的な支持を得て日本全国に広がっていく。多くの消費者にとって、その住まいがどのようなものかを、即座にイメージさせることが可能だったがゆえ、住まいを市場へと流通させる際の有効な手段ともなったのだ。

しかしながら、このnLDKという「かた」は、パンデミックによりわたしたちの「ホーム」が、リビング・ダイニング・キッチンを中心にした団欒と寝室での休息以外にも、働くなどのこれまでにない機能が求められたとたん、困難に直面したのではないだろうか。新たに働く場所を確保するのが難しく、リビングが即席のワークプレイスとなったという話もよく耳にする。多くの人にとって、「ホーム」には団欒・休息以外の活動を吸収できる余白がなかったのである。

「ホーム」：環境の問題

新型コロナウイルスの感染を防ぐには換気が有効だとされた。しかし、昨今の住宅市場で供給される「すまい」は高気密・高断熱を良しとする風潮で作られている。高気密・高断熱は自然環境によって変動する外気とすまいを切り離して、内部空間の空気の温度・湿度を一定にし

[1] 東京都知事室サイト
https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/04/24.html
[2] 英国保守党サイト「The Prime Minister´s letter on Coronavirus」
https://www.conservatives.com/news/boris-johnson-letter-coronavirus

ようという考え方であるが、突如、外気と接続せよと言われても基本的な考え方が矛盾してしまう。

まだクーラーが住まいに備え付けられる前、伝統的な日本の家屋には、多くの引戸が設けられ、これらを開け閉めすることによって、外部の風を取込んで「涼」をすまいに取り入れてきた。また冬の寒さには縁側というすまいの外と内をつなぐ「中間領域」が、外の冷たい空気を直接、生活の場に入り込んでくるのを防ぐ役割を果たしていた。内部空間を緩やかにつなぎ、外気と共存する暮らしがそこにはあったのだ。

これに対して、nLDKという「かた」は、それぞれの機能の異なる「部屋」が壁や扉で区切られている。この独立した「部屋」には、それぞれ窓は設けられるが、夏・冬の時期は、主にクーラーによって個別に温度調整される。そして、それらの温度を保つため、「すまい」全体は高気密・高断熱として計画され、「すまい」全体に「風」が流れることはない。ここでもパンデミックは、現在の主流となっているすまいの考え方に対して疑問を投げかけるきかっけとなったのだ。

「ホーム」：モノの問題

新型コロナウイルスの感染が、飛沫感染すると分かった時、「ホーム」にはそれを防ぐための様々な措置が必要となった。例えば、もし家族に感染者が出た場合、個室に隔離するだけでは不十分で、場合によっては「すまい」に新たな仕切りなどが必要となる場合もあろう。また、長きにわたる「ステイホーム」のなかで、人々は「すまい」に変化をもたらそうとする動きもでてきた。植栽ができるような趣味のスペースを設ける、あるいは家での仕事を快適にする場所をつくるなど、「すまい」をチョットだけ変えるという要求が生まれてきたのだ。

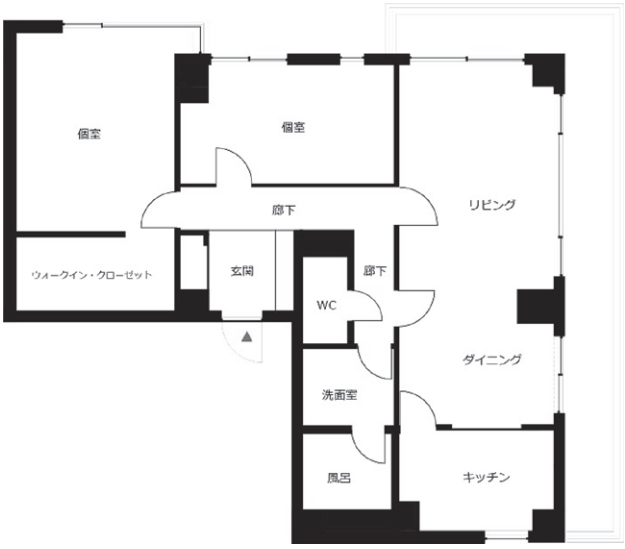
しかしながら、わたしたちの「すまい」は簡単には変えることができない。「すまい」は壁や扉など、多くの「モノ」で構成されているが、それらは一度つくられたら、がっちりと固定され、一般の住まい手が容易に変更できるものではない。「すまい」とは変化に極めて弱いものなのだ。だから、今回のパンデミックのように、様々な理由で「すまい」を変えたくなったとき、すぐに対応することができない。

このような「すまい」の「流動性」はパンデミックに限らず、指摘されてきたことでもある。「すまい」の家族構成や住まい方は、時間を通して変化するものである。本当はそれらに合わせて、「モノ」としての「すまい」も変わっていくべきなのだろうが、今日の「すまい」はそのようなフレキシビリティを持ち合わせていない。パンデミックは、このような現代の固定化された「すまい」という課題も浮き彫りにしたのである。

「マイホーム」

新型コロナウイルスの言葉が社会をにぎわす前から、現代の「すまい」に関する課題を乗り越えるような「すまい」を考えることはますます重要になっていると感じていた。そのようななかで、これらの問題を現実的に考えるきっかけができた。わたし自身の「マイホーム」である。築30年以上経つ中古のマンションを、リノベーションすることによって家族と暮らす「ホーム」をつくろうとしたのである。「マイホーム」をひとつの実験の場として、現代のオルタナティブな「すまい」のあり方を模索しようとしたのである。

既存の住宅は典型的な２LDKのマンションで、2つの寝室にリビング、ダイニング、キッチン、それに加えて風呂、洗面室、トイレという水廻りがまとまって配されていた。まず考えたのはこの機能の配置である。戦後日本の「すまい」を規定してきたnLDKというタイポロジーをいかにして超えることができるかが重要だと考えたが、それにはnLDKの各「部屋」を間仕切っている壁をすべて取りはらわないといけな



（図1）改修前平面図

（図2）改修後平面図

い。集合住宅の専有部分内の、床・壁・天井さらには設備機器すべてを取り払って、構造体と開口部のみの「スケルトン」状態にし、そこから住まいに必要な要素＝インフィルを構築していく計画とした。

「マイホーム」：機能への提案

「マイホーム」設計にあたって、まず私たち家族が「すまい」の中で必要とする行為をひとつひとつ洗い出してみることにした。nLDKのように「部屋」ありきではなくそこに住む人の「行動」によって空間の配置を考えられないかということである。究極的にはわたしたちの「マイホーム」は「寝る」・「働く（勉強する）」・「共に寛ぐ」という３つの行動が重要であると考え、これらのための３つの空間を基本とし、これらを極力、「廊下」を排した形でつなぐこととした[3]。

まず、廊下という移動だけの空間を減らすことが、「マイホーム」の空間配置上の大きな課題となった。そこで「すまい」の中心部に、家族の蔵書を集め、家族のそれぞれが勉強・仕事ができる空間：「働く（勉強する）」場所を設け、「すまい」のなかの公的な空間：「共に寛ぐ」場所と私的な空間：「寝る」場所を繋ぐこととした。また玄関からリビング・ダイニングへ至る動線も移動だけを目的とした空間をつくるのではなく、洗面の場として目的を持った空間とすることで、複合的な機能を持つものとし、異なる機能が連結する回遊式の「すまい」をつくることにしたのだ。

「マイホーム」において手洗いの場をどこにするかは、もうひとつの重要な課題であった。通常、手洗いの場は玄関から少し入ったところに位置する洗面室にある。今回のパンデミックでは感染症予防対策として手を洗うことが強く推奨されたが、パンデミックの有無に関わらず、手洗いの場は、玄関近くに配するのが理想ではないだろうか。そもそも浴室・洗面室・トイレが隣接して配されるのは、給排水をコンパクトにまとめるという建築施工上の理由であり、機能上の問題からではない。すまい手の行動を考えたうえで、合理的な配置を考えると、通常の水場のあり方とは異なるデザインが導かれる。そこで「マイホーム」では手を洗う場は玄関に隣接して設けることとした。

「住まい」の「合理性」を、いかに効率的に施

[3] 日本の集合住宅の場合、その多くは北側に玄関があり、南側にリビング・ダイニングがあるというパターンを持っている。この玄関とリビング・ダイニングをつなぐのが長い廊下である。この廊下という空間は概して暗く、長く、移動するためだけの空間になっている。このように「すまい」のなかで廊下の割合を占めるのは日本の住宅の特徴であろう。日本では入口→個室→リビング・ダイニングという形式が多いのに対して、西欧の住まいでは入口→リビング・ダイニング→個室という動線で「すまい」ができている。日本では廊下が動線の重要であるのに対して、西欧では動線の中心がリビング・ダイニングになっているのである。

工できるかという経済的な「合理性」でなく、いかに住まうかという行動的な「合理性」を追求したのだ。竣工後、多くの方々にコロナを意識してこのような配置にしたのですかと言われたが、これは今回のパンデミックより前から考えていたことであった。

（図3）改修後：オープンな回遊する「すまい」

（図4）改修後：玄関と一体となった洗面

「マイホーム」：環境への提案

住環境を快適なものとするため、自然換気を積極的に取り入れることは重要だと考えた。これも新型コロナウイルスの感染防止に関わらず、意識してきたことだ。先にも述べたように、昨今の住宅市場で供給される「すまい」は高気密・高断熱を良しとする風潮で作られている。高気密・高断熱は自然環境によって変動する外気とすまいを切り離して、内部空間の空気の温度・湿度を一定にしようという考え方であり、これにnLDKという部屋単位の空間配列が組み合わさる。その結果、「すまい」、特に集合住宅などでは、風を流すということは起こりにくくなり、その結果、我々の住まいの空気の質は機械に頼ることとなった。

「すまい」の換気を効率的に行うには戦略が必要だ。風は住まいの外に正圧と負圧が生じることによって生じ、室内にどのように風が流れるかは、これら異なる気圧を持つ窓の位置によって変わってくる。戸建て住宅の場合は、設計段階で窓の配置を計算することによって、風の流れをデザインすることができるが、マンションのリノベーションでは窓の位置はあらかじめ決められており、それらの位置を変えることは、管理規約上不可能である。場合によっては、既存の窓の配置からは、なかなか室内に風の流れを作り出すことが難しいこともある。そのような制限のもと、自然換気によって風が流れる住まいをつくりあげるには、部屋を極力区切らず、距離の離れた風上と風下に設けられた窓が空間的に繋がっている状態をつくることが必要になってくる。

そこで、「マイホーム」では上記の「寝る」・「働く（勉強する）」・「共に寛ぐ」という異なる空間を区切らずに、必要に応じて引戸によって閉じることができるようにした。通常のnLDKの「すまい」は異なる機能を持つ「部屋」が閉じられていることが前提となっているが、ここでは異なる機能を持つ空間が閉じずに連続

することにより、南側の窓から、北東の窓まで「すまい」のなかを風が流れるようにし、「すまい」の空気の質を再び外気に委ねたオープンな「すまい」を目指したのである。

「マイホーム」：モノへの提案

パンデミックになり、「ステイホーム」が求められ、わたしたちの「すまい」が必要に応じて、変化することを求められるようになったが、それより以前から「すまい」は時間とともに変化すべきだと考えてきた。「すまい」には「空間」のデザインだけでなく、それがどのように移り変わっていくかという「時間」のデザインが必要なのだ。「マイホーム」では、そのような「時間」とともに変化する「すまい」をどのように実現できるかを考えた。

しかしながら、家族の住まい方は時間とともに変化することは想像できるが、ではそれぞれの時にどのような設えが必要かはなかなかイメージすることができない。そこで、『設計した建築が竣工するということは、「おわり」ではなく、「はじまり」である』と捉えることとした。「すまい」の「はじまり」として、どのような状態が望ましいか、そう考えることにしたのだ。すると、「はじまり」の空間は、できるだけシンプルな「がらんどう」のようなものにして、将来の変化に備えておくのが良いのではと思えてきた。また、これまで「すまい」にインストールされてきた様々な「モノ」をできるだけ固定せず、フリーな状態にして、必要に応じて変えることのできるものにした。

例えば、「アイホーム」では家族が寝る空間はひとつの空間だが、天井にはレールを設置し必要に応じてカーテンで区切れるようにした。また「すまい」の中心である「働く（勉強する）」空間にある、本棚も固定式ではなく、将来的な蔵書の変化に合わせることができるよう、すべて可動式のものとした。さらには「すまい」のなかの照明も、多様な使い勝手ができるようにライティングレールを用いて、そこに自由に照明が取付けられるようにした。そして家族が団欒する場所では、これまで持っていたソファを思い切って廃棄し、より自由な使い勝手ができるような空間を目指したのだ。わたしたちの「マイホーム」のはじまりは、多様な「モノ」で構成される「すまい」の変化を許容するような、がらんとした空間であることが目指されたのである。

（図5）改修後：「マイホーム」の中心「働く・勉強する」空間

パンデミックと「ホーム」

新型コロナウイルス感染拡大というパンデミックが「すまい」にもたらしたもの、それはこれまでになかったような新たな指針を示すのではなく、「すまい」の本来のあるべき姿を改めて提示したことではないだろうか。そして、それらのいくつかは、わたしたちの伝統的な「すまい」が持っていたもののように思う。「すまい」を経済的合理性でなく、住まい手の「身体」の欲求に基づいてつくること、あるいは機械にたよらず、外気を取り入れた環境計画をすることは、極めて当然のことではないだろうか。しかし、日本の「すまい」が巨大産業となっていくなかで、このような「あたりまえ」のことが、なかなかできなくなってきたのではないだろうか。今回のパンデミックは、そのような「すまい」の「あたりまえ」を私たちに思いださせる「きっかけ」となるのかもしれない。コロナ禍と偶然重なった「マイホーム」の設計を通して、そのような思いを強く持つようになった。パンデミックを機に「ニューノーマル＝新しい生活様式」という言葉が生まれたが、「すまい」における「ニューノーマル」とは、新しい何かを見つけることではなく、わたしたちが忘れてしまった「すまい」の「あたりまえ」を見つめ直し、再定義することかもしれない。